

筆山

第62号／2017年7月
土佐中・高等学校同窓会
関東支部会報

編集人/ 中平 公美子 (59回)
発行人/ 関東支部幹事長 市川 直介 (53回)
関東支部ホームページ:
<http://www.tosako-kanto.org/>



小村新校長からのごあいさつ

「四十年前に中学野球部でノックを受けよった頃は、まさか校長先生になるとは部員の誰ひとりとして思うちゃあせんかった…」。校長就任に際して五七回、五八回生の中学野球部の皆さんからいただいた祝電の冒頭です。

この五七回生が中学三年の春に社会科の教員として着任してから、クラス担任、中学野球部・バドミントン部の顧問として、たくさんの生徒・保護者の皆さんと出会い、お付き合いをいただきてきました。さらに、広報や教頭としての仕事の中で、同窓の先輩・後輩の皆さまともたくさんのお会いがありました。こうした多くの方との「つながり」は私の大きな宝物です。冒頭の祝電は、まさにこの大きな宝物を改めて確かめさせてくれる、この上なくうれしいプレゼントでした。

百周年を間近に控え、土佐中・高等学校は大きな節目の時期を迎えていました。そんな時に、まさに「巡り合わせ」で、校長の任を命ぜられました。山本前校長が退任に際して、「伝統と誇りが灯つた松明を後任者に無事引き継ぐ事が出来た…」と述べられました。この灯火を消すことなく、新しい時代に、より輝きを増して引き継いでいくことが私に課せられた使命だと考えております。

その灯火とは、「人材の育成」という建学の精神の下、社会のさまざまな分野で活躍する人物を生み出してきた伝統に他なりません。新しい時代に相応しい人材を送り出すことができるよう、常に点検と改善を図りながら、学校運営に当たっていきたいと考えています。同窓の皆さんには、これからも物心両面にわたりご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。また帰省なさった折には、お気軽に校長室をお訪ね下さいますよう、お願いいたします。

2017年 関東支部総会・懇親会

今年の総会の基調講演には、リョーマゴルフ社長の谷本俊雄さん（58回生）をお招きし、学生時代の活動やゴルフクラブ開発の軌跡、他に手掛けている新規事業など幅広い内容をお話いただきました。起業家精神溢れる谷本さんの講演に卒業生一同が刺激を受けたことと思います。

懇親会は、上久保沙耶さん（89回生）の美しいメゾソプラノの歌声と上久保さんご友人のピアノ伴奏から始まり、今年ご就任された小村校長先生のご挨拶と森郁夫支部長の乾杯の音頭で開会しました。その後は、よさこいチーム『陽』の紹介やまるごと高知の出張販売の案内に加え、今年のチャレンジ企画である『人間bingoゲーム大会』へと移り、いつにない「〇〇回生の〇〇です。番号は…」といった会話が繰り広げられました。「bingoが出ないかもしれない…」等の運営側の心配をよそに、

見事bingoを獲得する参加者が続出し、7の会ゆかりの三酒造から届いた銘酒やリョーマゴルフからの提供品等を片手に、記念撮影を行いました。最後は校歌齊唱とエール交換、8の会への引き継ぎ式を行い、閉会を迎えました。

準備会では、支部役員の方はさることながら、他の会の先輩方からも多大なご支援をいただき、無事当日を迎え250名以上の卒業生にお越しいただきました。振り返るべき点はあるものの、参加された卒業生からは「土佐校で良かった。」、「当日ご協力いただいた卒業生以外の方からも「土佐校って良いな。」等のご感想を頂き、運営側としてこれ以上の喜びはありません。また、本会の企画・運営を通じて、素晴らしい土佐校の卒業生に出会えたことに感謝申し上げます。有難うございました。

7の回一同より



二〇一七年記念講演

今年の関東支部同窓会の記念講演は、リヨーマゴルフの谷本俊雄社長（五八回生）による「俊雄がゆく」でした。谷本社長は大学在学中に教材販売会社を起業し、その後、ゴルフ業界で一旗揚げるためリヨーマゴルフを設立し、現在に至ります。大盛況だった講演の内容をご紹介いたします。

川上正衡（五八回生）



社名のリヨーマは、谷本社長が坂本龍馬ファンであること、そして、一度聞いた瞬間に世間に広がりました。谷本社長は「高知県出身だから」と心から思っています。他県の出身であれば、恐れ多くてリヨーマを名乗ることなどできないからです。

谷本社長の人生の教科書は「龍馬がゆく」。龍馬さんからは、知恵と工夫、実力、胆力、絶対にあきらめない粘りを学びました。例えば、資金もないのに大洲藩に船を賣わせ、事故で船が沈没するや、紀州藩から多額の賠償金をせしめた「いろは丸事件」はケーススタディとしては最適です。

中高時代はハンドボール部で酒井先生に鍛えられました。さまざまなことに興味を持つ性格ですが、勉強だけには興味が持てませんでした。で、何をしていたかというと、中一の時、日高村の治水トンネル工事の手伝いで一トントラックの運転手。高一でバイク免許を取得、バイクをプラモデル替わり分解組立。高三の時、大型バイクの免許を、さらに一発試験で車の免許を取得。ついでに、同級生に一発試験での車の免許取得方法を伝授し、十人を合格させました。

大学時代、やはり勉強だけには興味が持てませんでした。で、何をしていたかというと、横浜本牧港の高級外車の船降ろしや、飛び込み営業で二十万円もする教材の販売です。セールスのコツをつ

かむまで、絶対にあきらめないと始めた教材販売は、十日間で契約なし、夜九時に最後の一軒と飛び込んだ先で初めての契約。もし、最後の一軒のドアをノックしないで、あきらめていたら、リヨーマゴルフの社長にならないと確信しています。その後は、大学二年で、全国五百人のプロセールスの中で成績一位になります。大学三年では、大学生三十人を雇い、不眠不休で教材を販売していました。

最初に開発したのは「ゴルフの素振り用練習器「スイングプロ」です。累計十八万台のヒット商品ですが、発売当初はまったく売れませんでした。ゴルフショップが店頭においてくれなかつたからです。そこで、龍馬さんから學んだ「知恵と工夫、実行力」です。どこのゴルフショップにも置いていないのに、広告を大量に出したのです。「お求めは、お近くの有名ゴルフショップ、またはHPで」と。そして、全国のゴルフショップに「スイング何とか」というのは注文できますか」と電話をかけまくったのです。結果、売りました。

これが、「世界一飛ぶクラブを作る」と苦難が七年間続きました。二億円超の自己資金を使い果たし、ようやく完成したものの、十万円するドライバーをどう販売するかが最大の課題でした。そこで、『知恵と工夫、実行力』であります。「他の最新クラブよりも飛ばなければ、ご返品下さい」と。そして、全国のゴルフショップに「リヨーマのドライバーはいつから入りますか」と電話をかけました。結果、売れました。コマーシャルに、プロゴルファーではなく、有名ゴルフ好きを登用したのも影響は大きかったです。

昨年末に、出身地の日高村に恩返しするため、リヨーマの商品を利用した日高村ふるさと納税「龍馬チャレンジ」を開始、この半年で一億円が集まりました。

リヨーマゴルフのドライバーは、今、世界（日本）でもっとも飛ぶと言われており、ビートたけし氏、原辰徳氏、安倍晋三氏ら多くの著名人が使用しています。リヨーマゴルフの縁で、先日、安倍氏と直接お話しさせていただきました。

龍馬さんの時代なら、山内密室候ごろか将軍様ということになります。龍馬さんは「おんしゃあ、まつことやるねえ」と褒めてもらえたかもしれません。





学・高等学校同





母校便り

校長 小村彰



校長 小村彰、教頭 岡松宏明（留任）
武市暢久・松村誠（以上新任）、教務部長
有瀬豊（新任）、生徒部長 田村欣久
(新任)、進路部長 藤岡優太（留任）、
図書部長 入交一夫（新任）、特活部長
楠目博之（留任）、環境部長 吉野すずし
(新任)、事務長 上田哲也（留任）、広報部長は松村教頭が兼任。また、学年主任
は高三 久米将裕、高一 阿波谷博史、中三
阿波谷博史、中三 福留正仁、中二 矢野
弘純、中一 島内麻千子の各先生となつて
おります。なお、今年度の新規採用は国語・
数学・社会（地歴）の各一名で、フレッシュ
な風を吹き込んでくれるものと期待してお
ります。

●新体制スタート

校長の交替と校務分掌の部長任期が重なり、大きな人事異動を行いました。主な役職は次になっています。

数学科の島崎雄一先生が3月末をもって定年退職されました。先生は本校四五回の卒業で、昭和五十年着任されて以来、数学の授業で指導力を発揮されるのはもとより、五四・五七・六三・六九・七三の各回のクラス担任を務めた後、平成十五年から十年間教務部長として、学校の運営に大きな貢献をされました。とくに、本校の最大の特徴である生徒の希望をかなえる選択制度維持のための複雑で膨大な作業を担われたこと。また、本校高校入試について、その特徴である生徒の希望をかなえる選択制度までの推薦入試と一般入試を一体化させる新しい制度の実現に導かれたことは、先生の大きな功績として今後に語り継がれるべきことであろうと思っています。先生の教えを受けた同窓生とともに、厚く感謝の意を表したいと思います。

●島崎雄一先生ご勇退

●大学入試よく健闘、課題も

二〇一七年度大学入試の結果をみると、全體として、現役生（九二回生）・既卒生ともによく頑張ってくれました。とくに、



公立医学部医学科と自治医科大の合格数が三八と、過去二十年間で最多だった昨年と肩を並べる数に上りました。この数は全國の高校の中で二六位にランクされるものです。また、いわゆる難関十大学の合計合格数は四五となつておらず、しかも超難関である京大医学部に現役生が合格するなど、胸を張れる面がたくさんあります。ただ、一方で東大の合格数は二名、しかも現役生はゼロという残念な面もあり、高いレベルを目指す意欲とそれをかなえる取組みを一層強化していく必要を強く感じています。

こうした学校の取組みを進める上で、昨年スタートした新世紀募金にお寄せいただいた净財が大きく役立っています。新年度からは生徒および教職員の海外研修制度を立ち上げましたし、ICT活用も着実に進めています。今後も皆さまの物心両面にわたりてのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

●クラブも頑張っています



運動部・文化部もそれぞれハイレベルな活動を続けています。高校の運動部は、五月二十日から始まる県体でインターハイ出場を目指して戦いに挑みます。厳しい戦いになりそうですが、一つでも多くの部がインターハイ出場できるよう応援していきたいと思います。一方、文化部のインター・ハイとも言える全国総文祭には、本校からオーケストラ・吹奏楽・美術・書道・放送・小倉百人一首かるたの六部門に合計四三名が参加することになります（囲碁将棋は五月中に決定）。高知県全体の参加数が一七六名ですので、ほぼ四分の一を本校で占めていることになります。今年の総文祭は富城県で開催されますが、三年後、本校創立百周年の二〇二〇年の総文祭は高知県開催です。その中心を担うべく、さらなる発展を目指していかなければなりません。



本部便り



四月十五日（土）、関西支部同窓会の前に行われた本部主催の本部支部連絡協議会では、本部からの報告事項の後、支部の現状や今後の検討課題について、大変意義のある意見交換が出来ました。各支部本部共通していた課題は、同窓会活動に六十回生代の参加者が少ないこと。また、大学を卒業されていられる方々が「在学中」のままでいること。その解消に向けて、有効な提案がありました。実行できるところから、やっていきたいと思います。



前厚生労働事務次官の村木厚子さん（49回生）が4月1日付で理事に就任されました

同窓会本部 会計

千頭 裕（五八回生）

同窓会本部二〇一七年ホームカミングデー総会は、八月十二日（土）に行います。筆山ホール講演は、母校の現役の先生、広井護先生（四八回生）にお願いしております。広井先生は昨年本を出されました
が、これがすごい人気で、さらに四月から高知新聞に「『童馬がゆく』のスリルとサスペンス」と題して連載をしています。実際に授業を受けられた皆さんは、学生の頃にすぐに戻られることがあります！初めて聞かれる方も、文学作品の「読みのスリルとサスペンス」の魅力に引き込まれていかれることを確信しています。

今年は、丁度「よさこい祭り」の時期ですので、是非ご帰高され、合わせて存分にお楽しみ下さい。
3月に高知城前にオープンした「高知城歴史博物館」（写真上）も人気スポットになっています！

同窓会本部二〇一七年ホームカミングデー総会は、八月十二日（土）に行います。筆山ホール講演は、母校の現役の先生、広井護先生（四八回生）にお願いしております。広井先生は昨年本を出されました
が、これがすごい人気で、さらに四月から高知新聞に「『童馬がゆく』のスリルとサスペンス」と題して連載をしています。実際に授業を受けられた皆さんは、学生の頃にすぐに戻られることがあります！初めて聞かれる方も、文学作品の「読みのスリルとサスペンス」の魅力に引き込まれていかれることを確信しています。

今年は、丁度「よさこい祭り」の時期ですので、是非ご帰高され、合わせて存分にお楽しみ下さい。
3月に高知城前にオープンした「高知城歴史博物館」（写真上）も人気スポットになっています！

■総会の報告

六月三日（土）霞ヶ関ビル東海大学交友会館にて、小村彰新校長等をお招きして、総会が行われました。活動報告や会計報告のほかに、年間会費についての議案が審議され承認されました。同窓会の財政基礎の強化と事務負担の削減に繋がります。また、会計として新役員に山下通子さん（五三回生）が選任されました。

新第十四条

年間会費は一〇三千円とし、会報の発行をはじめ事務運営費・通信費など運営資金に充てる。ただし、学生から受け取れを徴収しない。
（施行 平成二十九年六月三日）

■その他

十月一四日（土）十五時半から竹芝桟橋出航のヴァンテアン号トワイライトクルージングを行います。

はちきん会のおしゃらせ

関東支部便り



学生・社会人交流会のおしゃらせ

ご講演は、ライオンのCSR推進部長兼企画担当部長の小竹由紀さん（51回生）です。お友達をお誘いの上、奮ってご参加ください。



十一月二二五日（土）

午後二時受付開始

東京大学駒場キャンパス
学生食堂二階ダイニング銀杏
学生一千円・社会人三千円

お手本にしたい土佐高の先輩がきっといるはずです。まずは交流から始めましょう。

学生・若手社会人交流会

2016年11月5日



若手の会の起り

「関東支部をはじめ土佐高校の先輩方にはすばらしい方がおるのに、関東支部総会での基調講演・懇親会だけではもったいない！」

という七十回生小松岳志先輩（森・濱田松本法律事務所パートナー在シンガポールオフィス）の強い思いから、「学生・若手社会人交流会」はスタートし、二〇一六年十一月開催で第十回の節目を迎えました。本会は土佐中・高等学校同窓会関東支部公認の会として若手有志で運営しています。

関東支部総会の場ですと、大先輩が多く、学生・若手社会人はどうしても恐縮してしま

いがちです。

そこで小規模（また安価）に、しかしながらコンテンツは普通ではなかなか聞けない諸先輩方の価値のあるお話しを提供し、その後の懇親会ではしっかりと自分の意見を聞いてもらったり、交流を図つてもらえることを大きなテーマとして開催してきました。

一〇一六年十一月開催は 第十回の節目の年であった

第一回の尾崎知事のご出演から始まり、現関東支部長であられる四回生の森郁夫先輩（当時富士重工業社長）にもパネルディスカッションでご登壇頂きました。

十回目の節目の年となつた今回は、幹事一同で再度会の趣旨、今後の方向性をしっかりと議論しました。

学生・若手社会人に伝えたいメッセージ・

関東支部長である四回生の森郁夫先輩（当時富士重工業社長）にもパネルディスカッションでご登壇頂きました。

第一回の尾崎知事のご出演から始まり、現関東支部長であられる四回生の森郁夫先輩（当時富士重工業社長）にもパネルディスカッションでご登壇頂きました。



若手の会の今後について

テーマを明確にし、ご登壇頂く先輩方も、例年に比べると年齢層の若い、広い分野の先輩方をお招きしたパネルディスカッションとしました。

学生・若手社会人には、分かり易く、実践し易い内容をお話し頂けたと考えています。

継続は力なりの精神でまずは続けていくこと、根本の大きなテーマは変えることなく、一方でマンネリ化することのないように、激変していく時代を捉えたコンテンツを幹事一同で議論し、提供していかねばと考えています。

ご参加頂けないと会は開催できませんので、是非多くの卒業生に本会の存在を知つて頂き、ご参加頂けますと幸いです。必ずや得られるものを提供できると自信しております。

また、幹事も一年一年歳をとりますので、会の趣旨に賛同頂ける若い後輩にも是非幹事として参加して頂きたいですし、次世代へバトンを渡しながら、定番の会として続けていくければと考えています。

最後になりますが、これまでご登壇頂き、また後方で多大なるご支援を頂きました諸先輩方にはこの誌面をお借りし、あらためまして御礼を申し上げます。

若い力で運営している会ですので、時として方向を誤るところがあるかもしれません。引き続きご指導、ご鞭撻を賜ります様、何卒宜しくお願い申し上げます。

二〇一六年十一月五日、学生・若手社会人交流会イン二〇一六が開催されました。今回の交流会は、一部がパネルディスカッション、一部が懇親会という二部構成で行われました。私はパネルディスカッションで、当日のモテレーター（司会）を務めさせていただきました。八三回生の結城優と申します。当日の様子等について簡単に紹介させていただきます。

パネルディスカッションは、「私たちが三十歳までの土佐高生に絶対伝えたかった仕事の話」と題して、NHK職員の三浦先輩、フィギュアイラストレーターのデハラユキノリ先輩、弁護士・歯科医の堀内先輩と、様々なジャンルの第一線で活躍中の三名の土佐高の先輩方をパネラーとしてお招きしました。「三十歳までの土佐高生」ということでしたが、私自身二十代であることもあり、当日を大変楽しくしていました。

パネルディスカッションでは、今までにない試みとして、開始直後にパネラーの方々と参加者全員での乾杯（！）を行いました。これによって、口が滑らかになつたパネラーの方々から、「そんなことまで！」というような話を引き出すことができ、また、会場の参加者との双向の交流にも繋がりました。土佐高出身の皆さんなら、お酒でも呑みながらざっくばらんに話したときの方が、面白いアイディアが出たり話が盛り上がりつたりすることは、経験として理解いただけるかと思います。ただ、モテレーター（司会）としては、時間配分を気にしながら、口が滑らかになりすぎたパネラーたちに割り込んでいくには苦労しました…（苦笑）

パネルディスカッションの後には、懇親会が行われました。印象的だったのは、大先輩の方々からも、「パネルディスカッションみよつたら、若い人たちのエネルギーをもらつたわ！」「どう！」と言つてもうれたことです。「三十歳までの土佐高生」に限らず、すべての参加者が意味のあるパネルディスカッションとなつたことを大変嬉しく思います。

（結城優・八三回生）



パネルディスカッション

感想やご意見をいただきました

講師のみなさまがパーソナルエリアの的を瞬間にすっぽ抜く人間力は魅力的でした。また、その準備にご苦労されたということも印象的でした。段取りごくろうさまといいたいです。

自分に合った仕事を就くには、他人からのアドバイスや恩師との関わりを大切にすること。独身ならば、転職の時期や方向性も自分を信じてみること。他人の人生や人生観を聞く機会の大変なこと。いろいろ発見がありました。

若手社会人だけでなく、中堅、経営者層など、幅広い年齢層の交流も考えたらどうでしょうか？若手同窓生の関わりが広く深くなることを期待しています。



例年とはかなり雰囲気の違う会になりましたが、ざくっくばらんに先輩方の学生時代のお話や現在の仕事などをお伺いすることができ、学生の方にとって、社会人が少し身近に感じられるような会になったのではないかと思います。若手社会人としても、少し先を走る先輩のお話を伺うことができ、とても参考になりました。来年以降もパワーアップした会にしていければと思います。



一つのキャリアコースを突っ切っていく感じの方はいらっしゃらなかつたが、結局そのようなレールに乗つた順当な生き方でない生き方をするのは難しい。その中で様々なコースを生きてきた方の話を聞けるのは有意義だった。

高知県からの参加でした。高知を出て活躍されている方がどのよう外の世界と関わり、高知や土佐高校をどのように見ているのか少し知ることが出来て興味深かったです。県外在住の土佐高校の卒業生は、これから母校や高知にとって、とても大切な存在です。関東支部の活動が今後ますます活発になることを期待しています。

十一月五日に行われた土佐高若手の会にひょんなことから参加させて頂きました。参加のきっかけは同級生のデハラユキノリから、今度、土佐の後輩と一緒に飲もうという誘い。その誘いを安易に受けてしまい、予想もせず若手の会のパネラーとして参加せざるを得ないことになってしまった。

私の経験を話すことが後輩たちの役に立つかどうかはわかりませんでしたが、就職活動や転職活動についてならば、興味があるのではないかと思い、どんな就職活動をして、どうして転職したかについて話させて頂きました。

自分の就職活動中、いまでも印象的覚えているのは、錢湯で知り合ったおじさんが、「わい、定年になってからこの仕事が自分に合つたかどうか考えるのに、大学生やらが『この仕事がいちばん』てわかるかい。」と言われたことです。『この会社で働きたい』と思えるのはもちろんすばらしいことです、そういった考え方のせいで自分の可能性をせばめてしまうことは実にもったいないことです。若手の会に参加していた後輩たちには、志望する会社や業界をせばめることなく、目一杯頑張って欲しいことを伝えました。興味のない業界の説明会で学んだ内容が、今思っている会社の面接で生きるかも知れません。

三十代前半、外資系保険会社からテレビ局へ転職しました。十年近く営業職を務め、叢業以外のスキルを身に付けようと、社会人大学院で学んだことが転職のきっかけになりました。いまでも、フルタイムで働きながら大学院とは我ながらよくそんなエネルギーがあったものだと思います。

そんなエネルギーがあつたのも、高校、大學といった学生時代に全力で遊んだからだと理解しています。四十代になり、周りの同級生の活躍を見ていると、勉強でもサークル活動のような遊びでも学生のうちに懸命に何かに打ち込むことが、社会人になってからのエネルギーとして活きてくるのではないかと考えるようになりました。後輩たちは学生時代にしかできないことや、若いうちはしかできないことを頑張って欲しいと思います。

期せずして、この会に参加させて頂き、母校との繋がりを久しぶりに感じることができました。二十歳以上も歳のはなれた後輩たち、顔も名前も知らない後輩なのですが、やはり母校の後輩はかわいいものです。かわいい後輩を少しでも励ますことができたのであれば、参加してよかったです。

(三浦聰樹・六八回生)



私たちが30歳までの土佐高生に絶対に伝えたかった仕事の話

パネラーの皆様、幹事の皆様、今回より始まった新しい企画、大変面白い企画で楽しい時間を過ごすことができました。特に今回は同世代がパネラーで、転職をする勇気も力もない、芸術のセンスない、たいした資格もない自分には、同世代の先輩、後輩の活躍が刺激となり、頑張ろうという気持ちになりました。

高知を離れ早や20年、高知の話、土佐の話ができるのも同窓生の集まり位です。アラフォーながら、若手の会に都合がつけば参加させて頂いております。

参加資格は「若手だという気持」ですので、皆様もご参加を。

たくさんの参加者から

とても面白いディスカッションでした。集客には肩書も重要ですが、内容はパネリストのパーソナリティ・経験によるところが大きいですね。

パネルディスカッションも非常に面白く、飽きずにタメになる情報をたくさん聞かせていただくことができました。その後の立食でも何学年も上の先輩方から有益なお話をたくさん聞くことができてよかったです。非常に面白く有益な会でした。



人と人が直接出会う場を作るのは、そもそも手間がかかることだと経験上思います。その手間を惜しまず、出会いからしか生まれないものを期待して、今後も続けていたければと願います。

自分の東京での大学生時代・20歳代・30歳代に、こういった同窓の先輩・後輩と土佐弁で素直に話す機会があれば、自分の日々の過ごし方や仕事・生活についての視点のヒントになったかも、と思いました。その意味で、自分の過去の、特に失敗話が、後輩の皆さんのがらかの参考になるのであれば、これまでそんな立場ではないと考えてきましたが、今ぐらいうの年齢になると、そういう場に行くのも少しあは意味があるのか、と考えさせられました。



一般社団法人
土佐婚俱楽部
TOSAKON CLUB®

婚活のお悩みを心を込めてサポート致します
年に数回、合コン等やってます！ 詳細はHPで

代表理事・東京相談室長 織田祐輔（45回生）
顧問弁護士 浦田理有（76回生）

URL <http://tosakonclub.com/>
東京相談室 042-521-2020
〒190-0012 東京都立川市曙町1-12-19 吉田ビル402



これまで「名字」を取り上げた番組に出演してきましたが、「名前」そのものをメインテーマに据えて、毎週放送するというのは初めてのことはないでしょう。しかも、毎週木曜日「七時のニュー」に続いて放送という「ゴールデンタイム」ですから驚きです。

もちろん、いきなり決まったわけではありません。「昨年、昨年二回にわたって特番として放送し、それなりの反響や視聴率があつたことから定時化したもの

です。実は最初の特番に呼ばれた時から、「えっ!」という番組に出演しています。

担当ディレクターは「将来的にはレギュラー番組にし、毎週放送を目指していました」と言っていました。正直「何言ってんだか」という感じだったのですが、三

年後本当に毎週やることになりました。

しかし、本当に驚いたのはそんなことではありません。収録開始直前、実質的に仕切つていったディレクターから、レギュラー番組の開始にあたって「チーフプロデューサーにご挨拶を」と言われてエラ

イ人に会いに行きました。その、番組全員で見守っている園見太郎チーフプロデューサーは、なんと土佐校六四回生でした。

「日本人のおなまえっ!」は土佐校O

Bで成り立っているのです。

※小学館より「名字でわかるあなたのルーツ」好評発売中

「日本人のおなまえっ!」裏話 森岡 浩(五五回生)

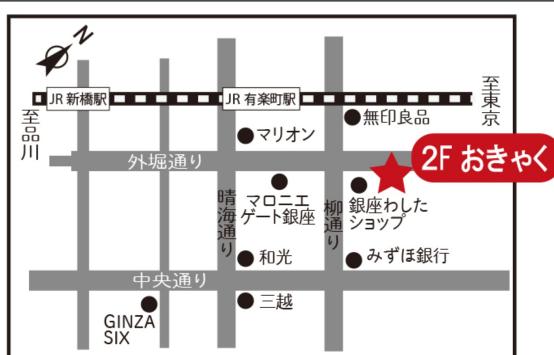
**土佐校生十四人
過去最多の参加です**

八月十八日に来日するガーナ高校生二人について、今年は特別な年です。独立六十周年、日本・ガーナの国交樹立六十周年、更に医学の恩人野口英世博士のガーナ上陸九十周年にあたるからです。この節目の年に東京と福島真猪苗代（野口博士誕地）で行われる両国学生の交流を取材するため、ガーナ国営テレビのクルーも来日します。

土佐中学・高校生十四人（過去最多）も上京、東京交流最終日の八月十七日（日）には、都内高校生やガーナ高校生と共に「原宿・表参道スーパーよさこい祭」で演舞を披露します。テレビカメラの前でいつそう張り切る「ロッテ・ガーナよさこい連」に「声援をお願いいたします。

午前十一時四十分
表参道行進トップスタート

ガーナ高校生交流はお蔭さまで十四年目。皆様の物心両面でのご支援に深謝申し上げますとともに、今後とも宜しくお願い申し上げます。日程詳細は後日関東支部ホームページでお知らせします。



www.marugotokochi.com/

TEL 03-3538-4351 (サンゴ・皿鉢・ヨサコイ)
〒104-0061 東京都中央区銀座1-3-13



2016年 演舞の合間に友達同士

ガーナよさこい支援会
代表 浅井和子（三五回生）
事務所電話 03（3234）3838

おきやく
TOSA DINING

一般財団法人
高知県地産外商公社
アドバイザー
濱田知佐（56回生）

筆山会 新年会



筆山会の新年会が一月十四日に新日鐵住金代々木俱楽部にて行われました。

森健さんのがん援護の後、森都夫さん（四一回生）の乾杯で陽射しが差し込み明るい室内は一氣におきやくモードに。盛り上がりも高知さながらで、同好会への参加を呼びかけ、近況を報告する声もだんだんと大きくなっています。

ますます元気な三回生の森健さんと吉本敏雄さんは、「素敵だなあ」「立派だなあ」と憧れる存在です。参加の多い三七と三八回生の勢力は七〇歳を超えているとは思えないパワーを持続中。年の初めに、健康を確かめ合い、また逝ってしまった友を想い、土佐高時代の武勇伝を懐かしむ筆山会。和やかな時間が参加者全員の心を豊かにしてくれました。

編集員



岡部直明さん(40回生) 黒川雄爾さん(37回生) 岩井千尋さん(42回生) 88回生の中谷君・川崎君も参加



清々しい明治神宮で1年の健康を祈願



土佐ハイクの会 池田勲夫さん（38回生） 百名山踏破



1995年38回生の会合で「50歳までに富士山に登ろう」「登ったことないだろう」「しいよいき」の言葉で始まった富士登山の会は、酒席での打ち合わせばかりで、実行は2年後の1997年で、37・38回生主体の夫妻、子供連れで総勢28名の1泊2日の登山であった。登山後の反省会の折、飲んだら話はデカくなり、「買い物揃えた装備もあるき、これから年1回百名山を目指そう」「山旅の後のビールはうまいぜよ」「会の名は土佐ハイクの会としよう」と反省会が発足会となっ



(左) 中島宏さん・百名山踏破の池田勲夫さん
(右) アルバム作成の沢村武彰さん

た。その後は尾瀬至仏山、乗鞍、立山等々錚々たる山を登り、ある時昼食で立ち寄った山の茶屋でハイクの会を俳句の会に間違われた不純な動機で11回目より俳句もやろうとなった。その後メンバーを増やしつつ、20回を数え今日に至っている。

百名山を登ろうと決めた会ではある

が、手の届かないところもあり20年で15座がやっと。百名山と言われるだけのことあり、自主登山で百名山を目指すメンバーでも40座が精一杯。その百名山を昨年10月、池田君が踏破した。

池田君のハイクの会初参加は、2013年の第17回の藏王、安達太良山（いずれも百名山）。高血圧とコレステロールの克服、アルツハイマーの予防のため、数年前からランニングをやり、血圧は正常に腹も凹んできた。これからはトレッキングで、山上からの景色や花々の素晴らしさに触れる喜び、爽やかな感動を味わいたいとの参加だったが、当初は山旅より速さを競い、後のビールのために登っているようだった。

百名山踏破を目標に決め、最初の2013年の7月から2014年11月までになんと合計56座。次シーズン4月から11月に26座。そして2016年4月から9月まで難関の17座合計99座を踏破し、あとは穂高を残すのみとなる。ハイクの会有志での百名山踏破祝賀登山計画は、メンバーの急逝もありはたせず。10月3日に穂高登頂を果たした。1座目から3年3か月で成し遂げた快挙であった。全くの素人だった池田君が、失敗と反省を繰り返し、百名山踏破し得たのは目標に向かう強い意志よりも、それに向かわせた山の総体的魅力と支えた健康な体であったと思う。

土佐ハイクの会も発足して21年目を迎えた。これからも山々の四季のうつろいのすばらしさを満喫するため続け、いつの間にか30年経っていたことになっているかも知れない、そうありたいものだ。

（38回生・中島宏）

土佐ハイクの会参加者募集 燧ヶ岳登山と ひうちがたけ 尾瀬ハイク 平成29年9月2日・3日

- 1日目 集合 7時15分
新宿工学院大学前
観光後 御池ロッジ泊
2日目 登山組は燧ヶ岳へ
散策組みは尾瀬沼へ
解散 新宿 20時予定
大人 27,000円（1泊4食）
子供 15,000円

お申し込みは

池田勲夫 090-5553-1119
isao.ikeda_6230@song.ocn.ne.jp
中島 宏 080-5932-7272
n-hirojie@keb.biglobe.ne.jp

ご家族一緒にご参加ください！



江戸百景(十一) 神田明神

神田明神

神田明神社の由緒に関しては、江戸期の資料もその後に書かれた書物も社傳を元にして書かれているようだ。社傳によると、天平二年（七三〇）創建となるが、すでに約千三百年を経過していることになり、江戸で最も古い神社ということになる。

神田明神祭礼

神田・山王の両神社の祭礼は、江戸の二大祭りとして江戸の町民を分して盛大に行われた。両祭とも、一年に一度盛んな陰祭りで、派手な練物や神輿は出ない。神田明神の祭礼は九月十五日と昔から行のみぎり、往古東国にて犠死したる平将門の靈を合わせて篤く葬り、神田明神と称えた。

現在に至るまで神田明神社の祭神は、恵比寿様、大黒様、將門様の三柱である。將門様は別にして恵比寿様・大黒様が主神なので、商売の神様として神田明神は江戸の氏子は神田明神と曰枝山王神社に分されていたと言つても過言ではな

い。山王神社は徳川家の産土神（うぶすながみ）であり幕府に篤く保護されている。神田明神は江戸市民の神様として主として江戸の町人に支えられた。



(上)江戸切絵図く尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)。神田明神社は江戸時代に入ってから、神田橋外、駿河台、湯島台と転々として、現在の宮元町(千代田区外神田)に鎮座するに至った。



(上)歌川廣重「江戸名所」より「神田明神」(弘化年間-1845頃)。神田明神は湯島台地の東端にあり、東側は崖になっている(葦簀張りの向こう側)。崖下は下町で「明神下」と呼ばれた。



(上)上図と同じ方向から筆者が撮影。今は明神下には大小のビルが建ち並んでいる。

江戸の最盛期は文化・文政（一八〇四年頃）である。神田祭はここに空前絶後の大祭に達した。当時の書物「江戸名所図会」にも「・・・練物だんじり等善尽く美を尽くし、町中を引渡す。是一の壯観なり。この日都下の貴賤、桟敷江戸前から現代まで、何といつても本祭りの派手な賑わいに尽きる。各町より出された神輿や華麗な山車（だし）が多くの人々の目をひきつけたが、それを凌ぐほどの人気があつたのが附祭（つけまつり）と言われた出し物であつた。曳き

幕末には江戸市民の内、露細商人や職人などが「江戸っ子」を自負していたが、頭に血の多いのが、お祭りと言えば、分け入らず、何とか祭りに参加して騒ぎ立てて立つて、特に神田っ子の勢いは凄まじいものがあつた。本祭りの年になると夏前から氣がそわそわし、仕事も身が

須田町に或る大工の棟梁がいたが、大借金して、神田祭の踊り屋台におのが娘をせて踊り屋台に乗せて一日練りまわさせられるのが最大の願いであった。天保の頃、江戸人は利口でないにもせよ、お祭りと

明治に入つても、神田祭の本祭りでは、多くの山車や附祭が繰り出し、明治十七年頃までは維新前同様に盛況であった。しかし越々道路上に電車の架線や電線が張り巡らされ、背の高い山車（花車、傘鉾等）は曳くことができなくなり、祭りの勢いは小さくなってしまった。

現代の神田祭は五月十五日を中心に行われる。年に一度の本祭りは、昔江戸中が浮き立つたほどの賑わいとは言えなかろうが、見物してみると、その喧騒・繁盛ぶりに驚く。今は山車は明神境内に一台ばかりご参考で飾つてあるだけで巡回はないのだが、神輿の連合渡御の日は百丁以上の町神輿が、日本橋、神田、秋葉原、御茶ノ水周辺に練り出し、囃子屋台は、葛西囃子の伝統を引く神田囃子を笛、太鼓、鉦で賑やかにやし立てて、神輿と一緒に町中を練り歩く。特に連合渡御最後の、百丁以上の神輿の明神社への入りの光景は圧巻である。また徐々に伝統的な附祭も復活ってきており、現代の下町っ子だけでなく見物の万人を熱狂させている。



(上)歌川廣重「名所江戸百景」より「神田明神曙之景」(安政四年頃-1857年頃)。前掲図より十年後の明神境内の初日の出を眺めている。前方の民家の建ち並んでいるところは「明神下」。野村胡堂の小説の主人公錢形平次は神田明神下に住んでいて「明神下の親分」と呼ばれている。

その後の神田祭

夜逃げと一度にやる元氣があった。「江戸っ子は女房子供を質に入れても祭に出る」と言われたが、実際、女房・娘を質に入れて資金を得て、祭りに浮かれる連中も多かった。「質に入れる」はもちろん比喩である。天保の頃だが、この風潮を平戸の殿様松浦静山公がその有名な隨筆（「甲子夜話」）で嘆いている。「尤も歎すべきは軽賤の者、祭礼用意の衣服等の料に支ゆるので、妻娘を妓に売ること、頗る有と聞く、かかる風俗を見捨てくれば、町役人の罪といふべし。」

『龍馬・元親に土佐人の原点を見る』執筆余話

中城正堯（三十回生）

平成十七年に肺栓塞（エコノミークラスマ症候群）で突然倒れ、救急車で昭和大藤が丘病院に運ばれた。危うく命拾いをして、一月半後に退院・退職した。この出来事が、本書執筆のキッカケである。

土佐中・高では新聞部活動に熱中、大学卒業と同時に学研・くもん出版と出版社に属し、毎年のようにニューギニア、シックム、ニアス島など海外の辺境に出かけ、『季刊民族学』『週刊朝日』などに民族探訪記を発表してきた。ところが、発病で酒と海外渡航がドクターストップとなつた。この頃、郷里の実家に残されていた古文書や絵画史料を、高知市民図書館に「中城文庫」として収めることが決まりた。史料整理・台帳作成のために、慣れないと理解できた。

こうして、民族探訪にかえて「中城文庫」を解説、郷土史関連の駄文を綴るようになつた。浮世絵学会や日本城郭協会にも所属、新しい視点から郷土史に迫ることや新史料の発掘を心がけてきた。もとより歴史研究者ではなく、編集者にすぎなかつたが、尾藤正英・黒田日出男・小和田哲男など日本を代表する歴史家と接しての役目をいつさい果たせず、編集長の中平さんにすべてお任せすることで乗り切ることができた次第です。この

持病を持つ身にとってありがたかったのは、国立国会図書館デジタルデータが、自宅や最寄りの公立図書館で自由に閲覧・複写できることであった。長宗我部のように離散した大名家の史料は散逸、県内の史料だけでは論述できないのだ。

幸い、出版後は高知新聞が紹介してくれ、帯屋町金高堂書店でも週間売り上げベストテンにはいったとのことだった。出版の反響か、先日は九月に放送予定の

龍馬・元親に
土佐人の原点を見る

【中城正堯】

高知県民も知らないかった
龍馬・元親をめぐる
歴史の新常态。
これが海の彼方に
飛躍を夢みた土佐人だ！

社会人大学生として学んだこと

勝田千砂（七回生）

二〇一五年の筆山五八号で、社会人大学院生になる抱負を執筆させていただき

てはや二年がたちました。この春、無事に修士論文を書き上げ、大学院を卒業することができました。論文のピークは前号筆山の編集作業真っ最中。紙面構成担当としての役目をいつさい果たせず、編

場を借りて、お詫申しあげます。

大学院は、平日の夜間と土曜日に授業がありました。働きながらの通学は大変でしよう、とよく聞かれましたが、仕事にメリハリが出て、時間管理が上達したように思います。つい残業してしまうという方にはおすすめです。

土佐山アカデミーの取り組みに興味を持っていたことから、事務局長の吉富慎用者を対象としたアンケート調査を行つて結果を分析しました。

研究の結果、土佐山アカデミー



NHK「ブラタモリ」で、龍馬が潜伏した離れを撮影したいとの依頼があった。浦戸城の史跡保存の動きもあり、拙著が高知の歴史再発見や史跡保存につながることを願っている。

NHK「ブラタモリ」で、龍馬が潜伏した離れを撮影したいとの依頼があった。浦戸城の史跡保存の動きもあり、拙著が高知の歴史再発見や史跡保存につながることを願っている。

作さんに研究をさせてほしいと依頼しました。研究計画も何も決まっておらず、大した説明もできませんでしたが、「よくわからないけど何でもOK！」と快く返事をいただき、土佐山地域でのフィールドワークが始まります。

土佐山地域で面白そうなイベントがあれば、時間を作つて高知へと飛んでいきました。土佐山地域には企業や行政関係者など多くの人が出入りしており、移住者も多く、不思議な魅力のある土地のように思いました。そこで、研究テーマとして、土佐山地域の「人が巡回する仕組み」と、「移住者が定着する秘訣」を解明することにしました。

これまでのフィールドワークの出来事をまとめなおしたり、雇用者を対象としたアンケート調査を行つて結果を分析しました。

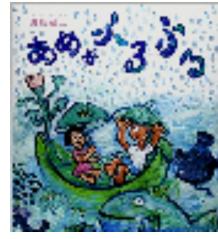
が「エージェント」となつて「人が巡る仕組み」を作ることで、地域住民がヨソモノ慣れする状況ができると考ります。これは、組織に新参者（新入社員など）が入ってきたときに、組織にないようにするためのプロセスのことを指します。土佐山地域の研究から、この組織社会化理論を地域に応用できると考え、実証したのが「地域社会化」理論です。移住者を呼び込みたい場合、地域が何を整え、どのように受け入れれば良いか、というチェックリストも論文に添付しました。これにより、大学院で優秀論文賞を受賞することができました。

今ではすっかり研究にハマり、研究生として大学院に残っています。引き続き、高知が元気になる研究を続けます。

出版レーダー

倉橋由美子（29回生）

「靈：文豪ノ怪談 ジュニア・セレクション」
<2017.4 ¥1728 汐文社>



田島征三（34回生）

「あめがふるふる」
<2017.5 ¥1512 フレーベル館>

大橋一章（36回生）

「唐招提寺：美術史研究のあゆみ」
<2016.12 ¥2700 里文出版>



塩田潮（40回生）

「日本国憲法をつくった男 宰相 幣原喜重郎」
<2017.1 ¥1058 朝日新聞出版>
「田中角栄失脚：「文藝春秋」昭和49年11月号の真実」
<2016.12 ¥907 朝日新聞出版>



西村繁男（40回生）

「あからん：ことばさがし絵本」
<2017.2 ¥1512 福音館書店>

黒鉄ヒロシ（41回生）

「色いろ花骨牌」
<2017.5 ¥648 小学館>
「もののふ日本論：明治のココロが日本を救う」
<2017.1 ¥864 幻冬舎>

高山宏（42回生）

「シェイクスピア・カーニヴァル」
(翻訳)
<2017.2 ¥1404 筑摩書房>
「見て読んで書いて、死ぬ」
<2016.12 ¥3456 青土社>



加賀野井秀一（44回生）

「メルロ=ポンティ哲学者事典 第二卷：大いなる合理主義・主観性の発見」
(監修、翻訳)
<2017.5 ¥5832 白水社>

矢野龍彦（46回生）

「みるみる音が変わる！ ヴァイオリン骨体操」
<2017.1 ¥1998 音楽之友社>

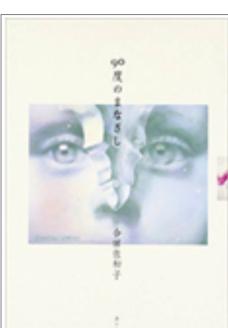


西田博（47回生）

「矯正職員のための法律講座（二訂版）」
<2017.3 ¥3024 東京法令出版>

森岡正博（52回生）

「33個めの石：傷ついた現代のための哲学」
<2016.12 ¥778 KADOKAWA>



私は六〇年代から晩年までに雑誌等に発表された執筆作品を収録し、幼少期の思い出や親交のある芸術家との出来事などが自由な文章で綴られています。次女でコラージュ作家の合田ノブヨさんが巻末で「普通の母親ではなかつた」と語るように、「二人の娘さんとの生活については昨今なら炎上するかも」と思うほどに世間体を気にせず”刺激的”な感性を披露しています。（遠藤瑞枝）

門脇護（53回生）

(ペンネーム 門田隆将)
「世界が地獄を見る時～日・米・台の連携で中華帝国を撃て」
<2017.2 ¥1512 ビジネス社>
「汝、ふたつの故国に殉ず：台湾で「英雄」となったある日本人の物語」
<2016.12 ¥1944 角川書店>



英保未来（54回生）

(ペンネーム 大森望)
「附上春樹『騎士団長殺し』メッタ斬り！」
<2017.4 ¥799 河出書房新社>
「NHK ニッポン戦後サブカルチャー史：深掘り進化論」
<2017.4 ¥1944 NHK出版>

森岡浩（55回生）

「戦国大名「御家」系譜事典」
<2017.3 ¥1080 宝島社>
「日本の名家・旧家」
<2017.1 ¥1296 洋泉社>
「名字でわかるあなたのルーツ」
<2017.7 ¥1296 小学館>

中城正堯（30回生）

「龍馬・元親に土佐人の原点を見る」
(本誌15ページに関連記事)

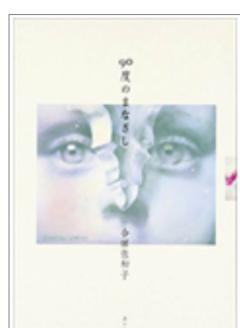


私の一冊

『90度のまなざし』

合田佐和子（三四回生）

本書は六〇年代から晩年までに雑誌等に発表された執筆作品を収録し、幼少期の思い出や親交のある芸術家との出来事などが自由な文章で綴られています。次女でコラージュ作家の合田ノブヨさんが巻末で「普通の母親ではなかつた」と語るように、「二人の娘さんとの生活については昨今なら炎上するかも」と思うほどに世間体を気にせず”刺激的”な感性を披露しています。（遠藤瑞枝）



<¥3024 2017.1 港の人>